

## 生徒指導の機能を生かした学力向上の実践

所属校：瑞穂町立瑞穂第二中学校  
氏名：川元泰史  
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：生徒指導・学習意欲・自己肯定感・学力向上・家庭・地域との連携

### I 研究の目的

学力向上の取組として、各学校では授業改善を掲げ様々な取組が行われており、その研究が成果を上げている。本研究では、『授業改善の取組と同時に、生徒指導の機能を生かすことで、学ぶ意欲が向上し「確かな学力」が身に付く』のではないかという仮説を立て、全国の先行事例の調査・研究をとおして、このことを立証しようと試みた。

### II 研究の方法

研究を進めるに当たり以下の手順で研究を進めた。

- (1) 生徒指導の機能の吟味
- (2) 研究の構想
- (3) 先行実践・研究校の調査
- (4) 先行実践・研究と本研究との関連の分析
- (5) 先行実践・研究校の分析と考察
- (6) 研究の成果のまとめ
- (7) 研究成果物の作成

### III 研究の結果

#### (1) 生徒指導の機能の吟味

生徒指導の定義として「一人一人の幼児・児童・生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、生徒の自己指導力の育成を目指すものである。そして、学校がその教育目標を達成するために欠くことのできない重要な機能の一つである。」(文部省：1988年)とある。ここでの自己指導力とは、直面する問題や悩みに対して、どのような行動が適切であるか、自ら判断し決定して解決しようとする力のことであり、これが生徒指導の究極の目的である。そしてこの力を育成するために生徒指導の機能として以下の三つの柱が考えられる。

- ① 児童・生徒に自己存在感を与える。
- ② 児童・生徒との共感的関係をつくる。
- ③ 児童・生徒に自己決定の場を提供する。

この三つの柱を具現化する取組として以下の領域がある。

- ① 学業指導

- ② 進路指導
- ③ 個人的適応指導
- ④ 社会性指導
- ⑤ 余暇指導
- ⑥ 健康・安全指導

各学校の現状では、「自分で自分のことを決められない」「適切な自尊感情を持つことができない」「人とうまくかかわることができない」等が大きな課題となっている。

#### (2) 研究の構想

「確かな学力」を身に付けるためには、「学習意欲の向上」は必要不可欠なものである。「学習意欲の向上」のために、教師一人一人が「授業改善」を目指し「授業改善推進プラン」を策定するなど様々な取組がされている。一方で学習意欲を向上させるためには、生徒指導の機能を生かした様々な取組も必要で、その両輪によって、より学習意欲を向上させることができると考えた。また、その両輪を機能させるためには家庭・地域との連携も欠くことができない。

#### (3) 先行実践・研究校の調査

研究構想の理論的裏付けとするため、具体的取組を実践・研究している学校を全国的に調査し、その中から12校に直接訪問インタビューすることにより、取組の成果と課題を分析・考察し理論の裏付けとした。

#### (4) 先行実践・研究との関連の分析と考察

先行実践・研究校のそれぞれの取組と成果を分析し、学習意欲との関連について考察を行った。

##### ① 「学び方・授業規律等」の確立と学習意欲

学び方・授業規律等の確立は、生徒指導上も学習指導上も極めて重要であること、また生徒一人一人の個人差に応じたきめ細かで継続的な指導が必要であることが分かった。その手立てとして少人数授業や習熟度別授業は、一人一人の生徒の能力や授業のつまづきを十分理解し、適切な支援ができる効果的な方法である。生徒自身も従来の一斉授業よりも自己の学習課題が明らかとなり、段階的な課題への取組により学習内容の理解が深まり、基礎学力が定着し、自信がもてるようになる。このため自己肯定感

や自己効力感がはぐくまれ、学習意欲が高まり「確かな学力」が身に付いたと考えられる。

#### ② 「キャリア教育」の充実と学習意欲

キャリア教育は「生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」である。これにより生徒の精神的・社会的自立を促し、人間関係を構築し、自分に合った進路を選ぼうとすることにつながる。それこそが自己決定の場である。本事例から、生徒自身が実際に職場体験活動をすることが効果的であることが分かった。職場体験活動をすることにより生徒たちは改めて、自分が社会から必要とされていることを実感するとともに、社会が様々な人の労働により支えられ成り立っていることに気付き、自分自身の将来の生き方を考えるようになると考えられる。そして将来の夢や希望を実現するために何をすべきかを考え、そのことが学校生活や学習等への意欲となり「確かな学力」が身に付いたと考えられる。

#### ③ 「適応指導」の充実と学習意欲

適応指導とは、性格に関する要求や悩みの解決、性格の偏り、問題点の早期発見と改善や解決への指導・助言により自己解決の力を養うことである。しかしながら中学生においては、個人でこの自己解決の力を養うことは困難である。本事例から、生徒一人一人が自己解決の力を養うためには、受容的・肯定的学級集団の形成を図り、教師とのかかわりや生徒同士によるかかわりの中で自己肯定感をはぐくむことが重要であることが分かった。

#### ④ 「奉仕活動」の充実と学習意欲

奉仕活動を行うことにより感謝され、地域の人たちと達成感を共有する体験などをとおして自己肯定感がはぐくまれ、自己有用感を感じることができる。このことにより学校生活や学習活動においても意欲的になり「確かな学力」が身に付いたと考えられる。

#### ⑤ 「部活動」の充実と学習意欲

生徒たちは、部活動によって様々な大人から指導を受けながら自己の目標を達成する喜びを体験することにより、自己存在感を感じ、自己肯定感や自己有用感をはぐくむことができる。また、部活動では、それぞれの部で共通の目標があり、その目標に向けて部員全員が日々努力する。そして部員全員でその目標を達成することで、互いに他者受容もはぐくむことができる。この結果、学校生活や学習活動においても意欲的になり「確かな学力」が身に付いたと考えられる。

#### ⑥ 生徒指導の三つの柱の総合的取組と学習意欲

(1)で述べたとおり生徒指導の目標である「自己指導力」を育成するために、今日的課題である生徒指導の三つの柱を教育活動の中に取り入れることが必要不可欠である。この取組により、学校生活に意欲的に取り組めるようになり、生徒一人一人の自己肯定感がはぐくまれ、学習意欲も向上し「確かな学力」も身に付いたと考えられる。

#### ⑦ 「授業改善」の取組と学習意欲

授業改善による、分かる授業や楽しい授業への転換を図ることにより生徒たちはより深く授業を理解することができ、自己肯定感や自己効力感をはぐくみ、更に学習しようという意欲が生まれ、その結果「確かな学力」が身に付いたと考えられる。

#### ⑧ 家庭・地域との連携

家庭・地域と連携し、多くの大人が生徒一人一人にかかわることにより、児童・生徒は大人から褒められ認められる機会が多くなる。このことにより自己肯定感がはぐくまれ、自信となり、学校生活や学習においても意欲が向上し「確かな学力」が身に付いたと考えられる。

### (5) 研究の成果のまとめ

本研究の成果として、様々な先行実践・研究校を調査し分析・考察することにより、以下の結論を導き出した。

- ① 自己肯定感や自己効力感を育成することは、生徒の学習意欲を高め「確かな学力」を身に付けさせる大きな力となる。
- ② 授業改善の取組における「分かる授業づくり」は、生徒の学習意欲を高め「確かな学力」を身に付ける上で効果がある。
- ③ 家庭・地域との連携は、生徒の学習意欲を向上させ「確かな学力」習得の大きな支援となる。
- ④ 実践・研究において大きな成果を収めるには、組織体制の確立が不可欠である。

### IV 考察

今回の研究で集めた先行実践・研究校の取組では、生徒の変容が客観的指標に基づいて明確に示されている学校に限られていた。今後実践する学校では、具体的取組によって例えば基本的生活習慣や生活意識、いじめ、不登校、問題行動、学力や進路状況などにどのような変化をもたらしたかを学力・学習状況調査や出席状況、アンケート調査等において経年的・客観的に評価し、指導の見直しや改善に生かすことが重要であると感じた。